

文献紹介

高地性集落と倭国大乱——小野忠熙博士退官記念論集——：雄山閣，1984年，A 5 判，453頁，7,800円

小野博士は学窓を出られてから今日までの半生をかけて、ひたすら地理学と考古学にまたがる学際的領域の研究、具体的には弥生系高地性集落の解明に取り組まれ、考古地理学の確立に多大の業績を積み重ねてきた。それは博士の数多くの研究論文のほか、周防島田川流域の遺跡調査研究報告『島田川』（昭和28年刊）や『高地性集落跡の研究——資料編——』（学生社・昭和54年刊）などが物語っている。

本書は昭和58年3月、博士が広島大学を定年退官されるのを機に、退官記念出版事業会（代表・北川建次広島大学学校教育学部教授）が編まれたものである。考古地理学を最初に提唱され、また若き日の博士に研究の方向づけを示唆された藤岡謙二郎先生が、序文の筆を執られているほか、収録されている20編の論文は何れも執筆者の日頃の研究成果を披歴した秀作ばかりで、誠に博士の退官記念論集にふさわしいものといえる。本書は序章、終章のほか、5つの章からなっている。何せ、大冊のため克明に触れることは紙数の関係で難しく、許す限りでその内容を紹介させて頂く。

序章の小野忠熙「高地性集落研究の課題」では高地性集落を立地・分布・形態・構造・機能など地理学的角度から取り上げ、従来の高地性集落の起源説を例示しながら、高地性集落を倭国大乱とのかかわり度とらえている点は博士独自の見解として評価すべきである。

I 「自然環境と開発」では日下雅義「弥生時代ころの地形環境」、角田清美「山陰海岸・江津砂丘地帯の地形」、伊達宗泰「低平地の開発についての問題点——奈良盆地中央部の場合——」の3編が夫撰河衆地域、山陰の江津砂丘地帯、奈良盆地における地形と弥生時代の集落の関係を考古学成果を援用して論じている。唯、福岡義隆「逆転層と高地性集落」は気温の逆転層の立場から高地性集落の畑作集落説をデータによって立証している。

II 『集落遺跡』では村川行弘「集落跡からみた高地性集落」、富士埜勇「響灘沿岸の高地性集落——山口県豊浦町所在・城山遺跡」、山本一朗「周防灘沿岸の高地性集落」、瀬川芳則「大阪の高地性集落——河内の湖北と淀川左岸——」の4編が収めら

れ、芦屋市会下山・響灘に臨む城山・周防灘沿岸の井上山や吹越・河内湖などの弥生系低地遺跡と高地性集落とを対比して、高地性集落の解明に努めている。中でも山本は高地性集落を吹越遺跡の調査結果からみて、邪馬台国など古代史で問題とされる課題と切離すことの出来ない点を強調している。

III 「弥生土器編年と年代」では小田富士雄「弥生土器の編年と年代研究の課題」、岡本健児「四国の弥生土器の編年と年代」、中野一人「山口県域の弥生土器の地域性」、森岡秀人「大阪湾沿岸の弥生土器の編年と年代」の4編からなっている。弥生系高地集落の時代の決め手として、低地遺跡より出土する弥生土器の時期区分が問題となるといわれる。これら4編は、時期区分の検討にあたって、出土地点の地域を考慮している点に注目すべきである。

IV 「倭国大乱」は山尾幸久「二、三世紀の西日本の動乱」、安田喜憲「続・『倭国乱』期の自然環境——大阪府河内平野の事例を中心として——」の2編が収められている。山尾は『魏志』倭人伝や『後漢書』など中国文献を史料として取り上げ、安田は自然地理の観点、とくに気候変化と倭国乱とのかかわりを論じている。

V 「邪馬台国以後」では梶国男「設計法からみた箸墓古墳築造の画期」、西川宏「古代山城の基礎的検討——瀬戸内地方の遺構を中心として——」、出宮徳尚「古代山城の機能性の検討」、千田稔「難波津補考」、山田安彦「平泉居館集落の位置選定理念について」の5編からなっている。梶は土木技術で採用される方眼設計法によって、古墳設計のプランを想定し、さらに築造年代の推定に及んでいる。西川、出宮は古代山城を取り上げ、神籠石との関係や機能を論じ、千田は古代難波京の大郡・小郡を問題として、文献の裏付と実地調査によって検討している。山田は防衛集落として機能をもつ平泉居館集落を方位、石蔵信仰などの観点から深く掘下げている。

VI 「終章」では小野忠熙「考古地理学とともに」、編集委員「小野忠熙博士と考古地理学」の2編からなり、考古地理学者としての博士の研究小史ともいべきものである。

考古地理学に極めて疎い筆者は失礼を顧みず紹介の筆を執った。高地性集落、否考古地理学理解のた

めにも一読をすすめた稀に見る高著である。

(山崎謹哉)

中川浩一著 地下鉄の文化史：筑摩書房，1984年，A 5判，324頁

著者は、既に、『旅の文化誌』（1979年，伝統と現代社）『鉄道記念物の旅』（1982年，クオリ社）などの著書及び『産業遺跡を歩く——北関東の産業考古学——』（1978年，産業技術センター）の編著において、アカデミーの約束ごとに囚われた記述のスタイルをとることなく、その意味では、非学術的な形をとりながら、自らの学問的発見を発表するという独自の方法を確立したが、本書もこのような著者独自のスタイルで書かれている。地理教育の歴史の研究者としてのみでなく、鉄道マニアとしても著者はよく知られているが、今回は、地下鉄に焦点を合わせ書き下ろしたものである。地下鉄の歴史そのものが120年余りしかないのであるから、歴史学的研究と言って、そんなに古い史料を使ったものではないが、本書は、歴史地理学における新しい知見を数多く含んでいる。学術書として書かれたものではなく、従って、出典や資料も記されていないから、それを学術的な成果と言うことはできないかもしれないが、過去の路線の復元のみでなく、過去の都市生活において地下鉄がもった意味、人々が地下鉄をどのようなものと考えていたかといったことが、歴史地理学のテーマと深く関わっていることは、論をまたない。その意味で本書は、歴史地理学にとっての豊富な情報源であり、幾つかの歴史地理学的研究テーマを示唆するものでもある。たとえば、過去のガイドブックや文学作品における交通体系に関する記述の中で、地下鉄がどのような位置を占めていたかということ体系的に検討することなどは重要な一つの課題となるであろう。

歴史地理学の研究とは言えないかもしれないが、本書におさめられた「漱石とロンドン地下鉄」および「漱石とメトロ」の二つの文章は、夏目漱石研究にとっては、立派な貢献をなすものであろう。おそらく、著者も意識してのことであろうが、この二つの文章は、単なる知的、エンターテインメントのための材料の提供にとどまらず、著者の推論を説得的に示そうとして、資料・出典なども本文中で詳しく示されている。この著者の漱石研究の直接的契機は、祖父が漱石の熊本時代の五高校長だったことによる

のであるが、外遊時の漱石に関する著者の研究には、地理学者としての素質も生かされていると言えよう。

本書は、歴史地理学の研究書として書かれたものではないから、それに対する言及が無いのは当然のことであるが、地下鉄と歴史地理学との関係ということになると、多くの都市において、地下鉄の建設作業によって、たくさんの遺跡や文化財が発見されたことにも言及しなければならない。どこの国でも、文化財保護に対する関心が大きくなっている現在では、遺跡にぶつかれば、地下鉄建設作業は、それだけ遅れるのであるが、初期の地下鉄建設時代には、十分に調査しないまま貴重な遺跡を、セメントで塗りつぶしてしまったこともあったろうと想像されるのである。(竹内啓一)

室賀信夫著 古地図抄—日本の地図の歩み：東海大学出版会，1983年，A 5判変型，230頁，3,000円

本書は、1982年2月に逝去された故室賀信夫教授の遺稿集である。著者は、生前仏教系世界図の研究によって、Imago Mundi 賞を授賞されており、地図学史研究の世界的な権威である。仏教系世界図に関する論文は、本稿には収められていないが、所収の11篇の論考いずれにも、著者の地図学史観を見出すことができる。

本書は、4部から構成されている。各部にはとくに標題はないが、第I部では、近代以前の日本の小スケールの地図の歴史が総論的に扱われている。第II部は、西洋や中国が、東アジアや日本に対する地理像をいかに結んでいったかを論ずる。第III部は、地図屏部、ポルトラノ図、大日本地震之図、東海道分間絵図、長久保赤水など、地図学史上の重要な地図や人物を扱う。第IV部では、日本のテラ・インコグニタである「北方」に対する観念や、同じく蝦夷地の地理学史的意義を論じたものである。本稿では、これらを個々に評することはせず、主に著者の地図学史観、あるいは地図観に焦点をあてることにする。

著者の地図学史観は、まず副題と同名の巻頭論文において端的に述べられる。それによれば、地図の歴史は単に地図作成技術の進歩を跡づけるものではない。それぞれの地図に表現された地理的知識や表現技術の背後にある「その図を作りその図を使った人びとの心情と生活」に着目することである。これは、著者が地図を見る時の一貫した姿勢である。こ